

Library Navigator

立命館大学 図書館だより
ライブラリーナビゲーター

ISSN 1345-3343

Vol. 131

Spring/Summer
2023



図書館イメージキャラクター：よむりす

[Message]

図書館館長からのメッセージ

小久保 みどり

立命館大学図書館館長 経営学部教授

[特集1]

図書館でできる フェイクニュースの 見分け方

[特集2]

知って得する 図書館の基礎知識

[連載企画] 図書館の使い方がうまい人 第5回

自分の“好き”から大学の学びを始める
～「知る喜び」との出会い～
漆原 良（産業社会学部 教授）

R

RITSUMEIKAN
UNIVERSITY

図書館館長からのメッセージ

小久保 みどり

図書館館長 経営学部教授



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。立命館大学へようこそ。そして在学生の皆さん、新学期を迎え、勉学、課外活動等に実り多き一年となりますようお祈り申し上げます。

さて、生まれて初めて図書館というものに足を踏み入れて以来ずっと図書館が大好きです。図書館に行くとわくわくします。図書館に住むことができたらいいなあ、と思ってきました。BKCにいた時にはその願いが少し叶いました。研究室と同じ建物にメディアライブラリーがあり、研究室からほんの少し歩いただけで、もう図書館の中という幸せな環境でした。立命館大学には、各キャンパスにすばらしい図書館があります。BKCにはもう一つの図書館、メディアセンターもあります。OICライブラリーでは、岩倉公園を見下ろす窓際の席でお気に入りの本や雑誌を読む、なんとも言えない至福の時。そして圧巻の平井嘉一郎記念図書館、まさに知のワンダーランド。立命館大学の学生になったからには、このような図書館をぜひ活用してください。読みたい本が見つからない、データベースはどう使う等、わからないことがありましたら遠慮なくレファレンスカウンターへご相談ください。レファレンスライブラリアンが親身に対応いたします。

この数年私たちを苦しめたコロナウィルスも、ようやく通常の感染症という扱いに変わろうとしています。この間、私たちの学びや研究のスタイルは大きく変わりました。オンラインを活用した、あるいは対面と組み合わせたハイブリッド型の授業、会議、研究会が当たり前ものとなりました。大学の図書館はそのような変化を支える砦の一つです。書籍や学術雑誌、各種資料のデジタル化が進んでいます。立命館大学図書館は、そうした変化に対応できる利用環境の整備を続けてきています。デジタルネイティブの学生の皆さんにはより親しみやすい図書館になってきているのではないかと思います。さらに、意見交換や議論が可能なラーニング・コモンズ（ぴあら）と呼ばれる開放的な空間を設けています。立命館大学図書館が、皆さんの学習・研究活動のホームグラウンドとして活用され、皆さんの伸びやかな学びを促し、数々の知的発見につながることを願っています。そして何よりも、存分に図書館を楽しんでください。

小久保 みどり／経営学部教授 1996年に本学経営学部に着任。2019年から2023年まで経営学部長・経営学研究科長。専門は社会心理学、組織心理学。社会心理学の視点から、不確実な状況下でのリーダーシップ行動、非正規従業員の雇用環境と働き方や、若者の職業選択のジェンダー差などについて実証的に研究してきた。最近では、緊急事態におけるリーダーシップと組織の対応について研究を進めている。趣味はピアノ、演劇鑑賞、美術館めぐり。

図書館でできる フェイクニュースの 見分け方

学生生活に役立つ情報リテラシー



社会全体を見渡すと、インターネットの普及は「信頼できる情報を見つけ出す」という作業をより難しくしたかもしれません。「何が事実かわからない。何を信じていいかわからない」。発信者が誰であるかわからない、大量かつ複雑で多様なメディア環境の中で私たちは「事実を知る」ことに対して混乱し、調べるといふ行動のやり方が分からなくなっているのではないのでしょうか。SNSで誰もが発信し、本物そっくりのディープ・フェイクや扇動が溢れている一方で、人々は自分が好む情報だけを与えられる（情報のタコソゴ）傾向があり、だからこそ真実を見極める力が重要になっています。

今回は、サトウタツヤ先生（総合心理学部教授）と濱田元子さん（毎日新聞東京本社論説委員）に、知って学び深める作業の元ともいえる、情報リテラシーについて語っていただきました。



STORY #01

濱田元子

毎日新聞東京本社
論説委員、学芸部編集委員



STORY #02

サトウタツヤ

総合心理学部 学部長



STORY #01

情報をただ受け取るだけでなく
自分の経験をもとに
考える時間もつくりよう

濱田元子氏

毎日新聞東京本社
論説委員、学芸部編集委員

スマホからの情報収集は受け身になりやすく、 エコーチェンバーも起きやすい

例えばコロナ禍をめぐる一連の情報や、東欧・中東における戦争・紛争に関わる情報などは象徴的ですが、あふれる情報の中から受け取ったものがフェイクニュースであるか否かを見極めることが難しくなっています。一方、十代から二十代の若者の間では、ニュースなど世の中の情報を、テレビや新聞ではなくTikTok やYouTubeなどの「スマホ動画」から得ることが普通になりつつあると言われます。この状況についてどうお考えでしょうか。

濱田：まず懸念されるのは、情報に対して受け身になっているのではないかということです。電車内でもずっとスマホを見ている人が目につきます。玉石混交のネット上の情報を休む間もなく受け続け、考える時間さえ奪われている状態なのではないかと思います。また、スマホでの情報収集はエコーチェンバー*が起きやすくなります。欲しい情報だけが次々と表示されるために、情報がたこぼ化してしまうのです。まずは、そういったことを認識する必要があると思います。そして、スマホから得た情報について、例えばニュースソースはどこか、動画で情報発信している人がそのニュースを発信するのにふさわしい立場なのかを立ち止まって考える時間を作る。それがフェイクニュースを見分けるスタート地点になるのではないのでしょうか。

※エコーチェンバー（echo chamber）：閉鎖的なコミュニティの中で同じ意見の人たちとの限られたコミュニケーションを続けることにより、その意見が正しいと思い込んでしまう現象を指す言葉。思想から趣味まで、似た傾向の人間同士が集まるコミュニティは居心地が良く共感も得やすい。エコーによって特定の意見や思想が増幅され、影響力をもつことは多いが、コミュニティ内部における常識がそのまま社会の常識とは限らない。また事実よりも共感が重視されるため、誤った情報を正しいと信じる人が、それを拡散させることでさまざまなトラブルが発生する。（出典：JapanKnowledge Lib）

エコーチェンバーを打ち破る 習慣を身につけよう

エコーチェンバーを打ち破り、情報を見分けるにはどのような習慣を身につければよいのでしょうか？

濱田：自分の考えに合わない情報を見聞きするのはだれしも不快です。でも、世の中にはそういうものもあるということを頭の片隅に置いておく必要があります。いつもとは違う種類の情報をのぞきに行き、「どうして違うのだろう？」と深堀りしてみると、視野も広がり、エコーチェンバーを打ち破ることもつながると思います。好奇

心を持って情報を得ようとするのは大切です。シャワーを浴びるようにただ情報を受け取るだけではなく、自分でも考える習慣を身につけてはいかがでしょうか。

学生の皆さんも、これまでに人と会い、本を読んで学んできた蓄積、経験値があるでしょうし、大学生活の中でいろいろなことを知りたい、学びたいといった知的好奇心もあることでしょう。まずはそれらを信じることです。情報に接した時は、自分自身の経験から、例えば先生の何気ない一言などを引き出してきて、それをもとに自分で考える時間を作ってほしいと思います。

そのような考える素地を作ってくれるのが読書です。特に小説は人と人との関係を言葉の間から読み取るなど想像力が不可欠です。情報に接する時も「私だったらどうするか？」と相手の立場に立って考えることも必要です。エンパシーと呼ばれるものです。読書はそんな力を養う一助になると 생각합니다。

新聞記者の情報の集め方、 記事の書き方

新聞記者として日々記事を書く際に、どのような点を特に注意しておられますか？

濱田：私のように30年以上長く記者をやっていると、記事にしようとする対象に接したときに、まずその情報を「斜めから見る」ことを私自身、習慣づけられていることに気がきます。人の話には何かしらのバイアスがかかるものだからです。たとえばある団体の活動を紹介する時も、ウェブサイトに書かれていることをそのままではなく、その団体に直接電話で確認します。現在の状況はサイト上の情報とは違っているかもしれませんし、直接話せば、より多くの情報が得られるからです。その分野で信頼されている専門家の本を手元に置き、疑問があればすぐに調べたり、事実と突き合わせるのも記者としての習慣ですね。今も本棚にはたくさん専門書籍があります。

新聞記事とSNSなどの情報・動画との本質的な違いは何でしょうか。


濱田：皆さんご存知のように、新聞社では記事を書いた後、そのまま紙面に掲載されるということではなく、デスクや紙面編集を担当する整理記者などによる何重ものチェックがあります。新聞社各紙においては、社として伝えたいことを加え世に問うということはもちろんありますが、厳重な何重ものチェックを経て記事にするというプロセスがあるので、新聞はニュースソースとして信頼できるものという自負があります。総務省『令和三年版 情報通信白書』の「各メディアに対する信頼」調査で、新聞を「信頼できる」とした人は

61%、「半々」をふくめると80%以上にのぼりました。大学の初年次教育において、図書館のリテラシー教育などで新聞記事のデータベースの活用を指導していますよね。新聞が他のニュースソースと比較してより信頼されていることなんだろうと思います。

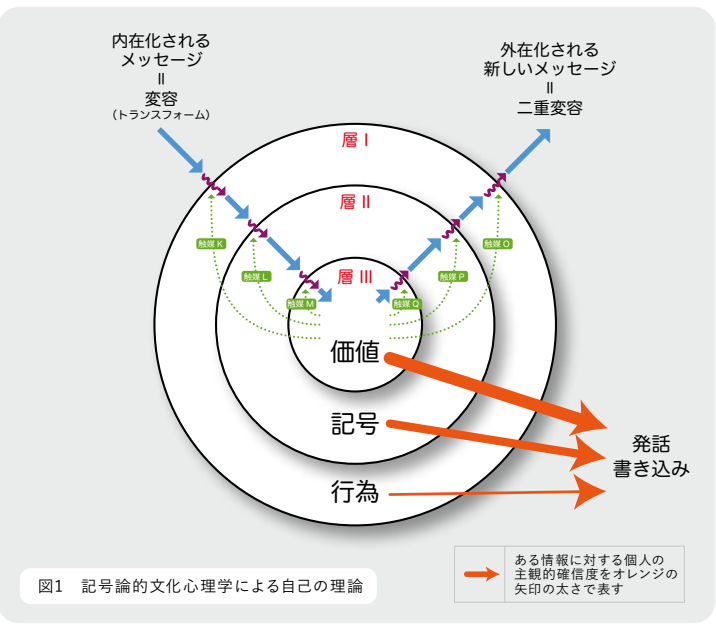
学生の皆さんには、スマホを見る時間の一部を新聞や雑誌など別のより信頼度の高いとされるメディアにふれる時間に割いていただ

ければと思います。一方、玉石混交の情報の中から“玉”を見極めるためには、“石”にも触れておくことも大切。フェイクニュースがはびこる現実もきちんと認識したうえで、より正しい情報を見極めようと努力する姿勢や習慣を身につけることもこれからの社会で生きる上では大切なことですね。

大学生を送る
学生の皆さんへの
メッセージ



大学に入学する皆さんは、選挙権を行使することによって自分たちの国をどうしたいのか、その社会への責任を持つ年齢に達しています。そんなことも考えながら学修してほしいと思います。確かな情報を見極めることが民主主義を健全に機能させることにつながります。図書館にあるさまざまなメディアをうまく使って学びを深め、これからの社会のより良い未来をつくることに生かしてほしいと思います。



結しないものなのでつまらなく感じるかもしれません。一方でスマホを見れば推しの噂話が見つかり、すぐに友達に伝えなきゃという気持ちにもなってしまうでしょう。しかし、だからこそ、考えてほしいのです。自分の価値に合わない情報を吟味することができるのが大学生です。スマホをしまい、メモを取りながら聴いてみましょう。最初は難しいかもしれませんが、それでもメモをとり続ければ、3回目の授業くらいから先生が何を話しているかがだんだんわかるようになってくるはず。それは、自分が成長して、授業内容が「記号」のレベルに入ってくるようになり、自分なりの価値観と照らし合わせるできるようになってくるからです。

授業を理解すること、先生の価値に合わせることはまた別の話ですね？

サトウ：もちろん、大学教員の価値に従わなければならないわけではありません。聴いたうえで私は違う意見だと考えてもいいのです。人の理屈を一度自分の中に抱えて考える訓練ができるのが大学という場です。それをせずにスマホだけを見ているのは本当にもったいないと思います。ある受講生が、「退屈な授業でスマホを見てても

退屈だけど、授業のメモを取るようになったら面白さがわかって授業時間が短く感じた」と言っていました。こういう感覚を経験してほしいと思います。

授業を聴かなくても、一夜漬けの丸暗記である程度の成績はとれるかもしれませんが。でも一夜漬けは「行為」のレベルに数日間知識を入れておき、答案としてアウトプットするだけのもの。自分の価値とすり合わせることをせず、「この先生の考え方と同じように書いておこう」というように教員の価値に合わせるような解答を書いているだけでは、自分の中には何も残りません。大学生のみなさんには、分からないものをわかろうとする努力、自分の価値とすり合わせる試みをぜひしてほしいと思います。

多様な「価値の山」の中で考えると、情報に振り回されなくなる

それが「多様な価値に触れる」ということなのでしょうか？

サトウ：大学には、自分とは別の国、別の地方で育った人がいます。また、多様な経験や専門分野を持つ先生もいて、価値の多様性に気づける環境があると思います。その中で、多くの人と出会い、さまざまな経験をしてほしいですし、殻を作ることなくたくさんの価値の山を持ち、いつかそれを山脈にしてほしいと思います。


それがフェイクニュースにだまされないことにもつながるのでしょうか？

サトウ：そうですね。多様な価値の山を作ると、ある価値ではこれは正しいと思っても、別の価値では違うかもしれないと考えられるようになるからです。自己内対話が可能になるのです。多様な価値の山の中で考えられるようになると、人の情報に振り回されることがなくなり、自分の判断に自信を持てることになり、結果的に自分なりの発信ができるようになるでしょう。

STORY #02

人の価値を自分の中に抱えてみる経験を重ね「価値の山」をたくさん作ろう

サトウタツヤ先生
総合心理学部 学部長



自分の「価値」に合う情報は、すんなり入ってきて人にも伝えたいくなる

「フェイクニュースを信じてしまわないためにはどうすればよいか」との問いに、毎日新聞の濱田記者から「スマホからの情報をそのまま受け取るのではなく、一度立ち止まって考えよう」というお話がありました。心理学の研究者としてこのお話をどう受け止められましたか？

サトウ：極めて重要な指摘だと思います。即断即決はフェイクニュース対応にとって危険です。記号論的文化心理学には、「自己」つまり心の構造は「価値」「記号」「行為」の三層からなると仮定したモデルがあります(図1)。一番上の層である「価値」は、今までに見たり聞いたり教えられたりして作り上げた個人的な価値のこと。一番下の「行為」は自分の中で十分に納得はしてはいないけれど、自分の言葉で話したり書いたりすることができるレベルのこと。

自己の山の一番上の「価値」に合う情報は、すんなり入ってきて、人にも伝えたいくなるものです。現在のSNSの状況を考えてみてください。自分の価値に合う情報がどんどん届くようになっていきますね。自分の価値に近いので気持ちがよく、すぐ信じてしまい、すぐ人に伝えたいくなるという仕組みになっているのです。だからこそ「立ち止まって考えること」が大切なのです。図1のモデルの「記号」のレベ

ルで情報を咀嚼してから判断することが大事です。そのことを濱田記者は「一度立ち止まって」と表現したのだと思います。


自分の価値に合わない情報は取り入れられることなく表層のレベルで弾かれがちです。たとえば死刑制度廃止に賛成の人と反対の人が議論すると、お互いに相手の言うことを聞かず、それぞれが一方的に主張するだけで議論が深まらないということが起こりがちです。しかし、大学生活は、対立しながらも議論を深めることができる時期ですから、自分と違う意見だからこそ、自分と異なる意見についても「記号」のレベルに一度取り入れてほしいと思います。

メモをとって授業を聴くと、内容がだんだん「価値」のレベルに入ってくる

スマホだけで情報を得ていると、これまでの価値が強化されていくだけになるといえることですね。多様な価値に触れるにはどんな習慣を身につければよいのでしょうか。

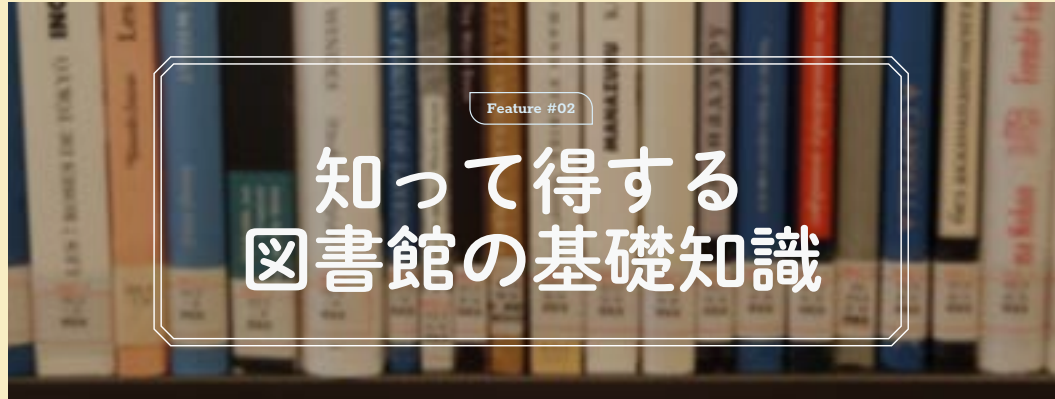
サトウ：一つは、本や新聞を読むこと、人と話すこと。そして意外に盲点なのが、「授業を聴く」ことです。大学の授業は、理解できないことが話されることも多いこと。そして、自分の価値には直

大学生を送る
学生の皆さんへの
メッセージ



立命館アジア太平洋大学の出口治明学長は、大学生のうちになすべきものとして「人・本・旅」をあげておられますが、最も身近である授業において価値の山を作る努力をするだけでも、大学生活が意味のあるものになると思います。あらゆる領域の専門家が自分の目の前で専門分野の話をしているのです。理解できなくても食らいつく、少なくともメモをとって自分の言葉に置き換えてみる。15回かけて専門家の言うことを少しでも理

解しようという態度が身につけば、結果として、さまざまなものの見方ができるようになるし、フェイクニュースに振り回されることもなくなると思います。わからないからこそ食らいつく、という精神がフェイクニュースに振り回されない自分を作り上げるのです。また、企業の皆さんが大学卒を採用したいと思うのは、大学生が様々な価値とぶつかり合いながら価値の多様性を実現できていると期待するからこそだと思います。



立命館大学図書館に新しい図書資料が並び、みなさんが手に取るまでには多くの工程を経ています。今回はその一連の流れを紹介します。

1 選書

立命館大学図書館では、『図書館資料収集の基本方針と収書基準』（以下、「収書基準」）にもとづき、教育・研究および自主的学習の支援に必要な資料を収集しています。学術的な資料を中心としつつ、教養書なども広く収集するよう努めています。

主な選書の方法

■ カタログやチラシ、書店のWeb サイト等の新刊情報から資料を選定

新刊情報だけでなく、すでに所蔵している資料の改訂情報もチェックし、最新版の資料の選定に努めています。

■ 学生・教職員など利用者からの購入希望申請、推薦を受付

利用したい資料が図書館に所蔵されていない場合や図書館の蔵書として推薦したい資料がある場合は、利用者のみ yourself が図書館ホームページの MyLibrary から申請することができます。図書館で申請を受け付けた後、収書基準に照らし合わせて、購入の可否を判断しています。

2 発注

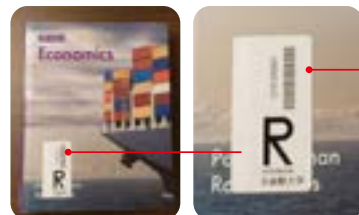
選定した資料をすでに本学図書館で所蔵していないかどうか調査したうえで、書店に発注します。

3 納品・検収

発注した資料が書店から納品されたら、発注した資料に間違いがないか確認します。また、乱丁や落丁、汚損や破損がないか1ページずつ目視で点検します。

4 受入

1冊ずつ、登録番号として資料番号（11桁）を付与し、図書館システムへ入力をしていきます。これにより、立命館大学図書館の蔵書として登録され、受け入れたことになります。



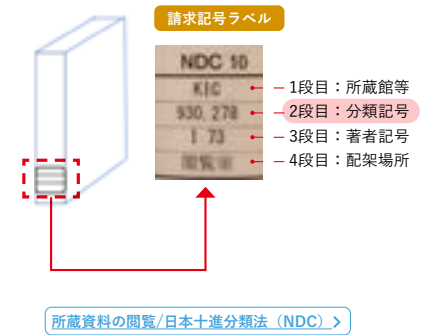
資料番号は、表紙に貼り付けられている資料番号ラベルで確認できます。

5 目録・分類

利用者のみなさんが探している資料を検索したり、書架で見つけることができるように、書名、著者名、出版社、出版年などの資料に関する情報（書誌情報）と、資料番号、所在などの資料を管理する情報（所蔵情報）のデータを作成します。

また、資料の主題（テーマ）を表わす分類記号を付与します。立命館大学図書館では、分類記号と著者記号などを組み合わせたものを請求記号と言います。どの書架に資料が配架されているのかを示します。

これらの情報を図書システムへ入力することにより、蔵書検索（RUNNERS OPAC）で資料を検索したり、書架で直接資料を探すことが可能になります。



図書資料の分類

日本十進分類法（NDC）
新訂10版の抜粋
第1区分（分類記号の1桁目）

0	総記
1	哲学
2	歴史
3	社会科学
4	自然科学
5	技術
6	産業
7	芸術
8	言語
9	文学

[所蔵資料の閲覧/日本十進分類法（NDC）>](#)

6 装備

目録の作成や分類を付与した後は、資料を利用しやすい状態にし、書架に並べるために「装備」という作業を行います。



書架に資料を配架した際、利用者のみなさんが探しやすいように、背表紙の下の部分に、分類記号などを印字した請求記号ラベルを貼ります。

立命館大学図書館の所蔵であることを表わすために、資料に直接押印します。

7 配架～利用

このような工程を経て、発注から2週間～1ヵ月程度で資料が書架に配架され、利用できるようになります。

資料は、請求記号の配列順に配架されている＝主題別にまとめて資料が並んでいるので、書架で直接ブラウジングしながら同じ分野の資料や読みたい資料を探ることができます。



書架ごとに、配架されている資料の分類記号と著者記号を掲示していますので、資料を探す際に参考にしてください。

図書館で資料を探すとき、資料を手にとるとき、このようなたくさんの工程を経ていることを思い浮かべてみてください！

自分の“好き”から大学の学びを始める ～「知る喜び」との出会い～



漆原 良
産業社会学部 教授

大学に入学してこれから何を学びたいかが明確な人がある一方で、何をやればいいのか分からない、好きなことがまだ見つかっていないと悩んでいる人もいます。好きなことがあれば、それを深く追求することによって、大学生活はより楽しく充実したものになるかもしれません。“好き”を探すための図書館の活用方法について、産業社会学部の漆原先生にお聞きしました。

研究テーマ	(1)運動学習における接触付加による感覚入力を与える影響 (2)感覚運動統合に基づくトレーニングが人の潜在的可能性に及ぼす影響
専門分野	神経生理学, スポーツ, 運動制御, 体性感覚誘発電位, 運動学習
著書	「現代スポーツ論の射程—歴史・理論・科学」 (共著) 文理閣 (2011年) 「スポーツの近現代—その診断と批判」 (共著) ナカニシヤ出版 (2023年)

文系・理系の枠を超えて人の潜在的な可能性を追求

私の研究上の関心は、人がもつ潜在的な可能性を追求することにあります。

陸上競技をしていた高校生の頃に、スポーツは自分の身体能力を資源として活用し競い合うものだという思いを持っていたのですが、海外製の高性能シューズが流行したことで、スポーツに対して過度にテクノロジーが介入することの是非に疑問を持ったのが関心を自覚した始まりだと思います。

芸術系志望だったため高校時代は文系でしたが、家庭の事情から地元大学学際系学部の文系学科に進学しました。そこで自身の関心を思い出し、卒業論文では陸上競技の生体力学、修士課程では研究室を移り、脳波や筋電図を用いた動作制御の基礎的な研究を行い、博士課程では医学研究科に移って患者さんを対象にした研究を行いました。振り返ってみると、対象や方法が変化しながらも根底にある関心は一貫し、文系・理系の垣根を越えて関心を探求する姿勢に繋がったのかもしれない。

現在は大きく2つの研究を進めており、一つは「運動学習における接触付加の影響」です。リハビリテーションや運動指導の場面で、自分自身や他者が身体に触れることが学習効果にどう影響するのかというテーマの研究です。もう一つは「コーディネーショントレーニングの効果検証」です。「コーディネーション能力」は、スポーツの能力の筋力や持久力のような数値化できる能力だけでは説明できない部分の一部にあたり、パフォーマンスを発揮したり、学習したりするちからの前提になるようなものです。直接数値化することは難しいの

で、派生効果を観察することで検証を試みたり、そうした能力を仮定した構造でスポーツのパフォーマンスを捉えてみたりすることで検討しています。

スポーツは人の行動の一つにすぎません。スポーツも、楽器の演奏も、すべて身体を通して行う同じ行動です。切り離して見るのではなく、共通する何かを見いだすことができないかと考えています。例えばサッカーW杯では、チームプレーとしての合理性だけを考えれば、どの国も同じプレーを理想に掲げそうですが、そうはなりません。それは各国の背景に社会や文化の違いがあるからではないでしょうか。スポーツを狭い視野の中で見るのではなく、生理学的要素や社会的要素もある人間の創造的で文化的な営みの一環としてとらえる。そう考えると文系・理系の垣根を越えて学際的に、行動としての広い視野でスポーツを考えることやそれを産業社会学部の中で取り組むことが面白く思ってもらえるのではないのでしょうか。

学問は自分の好きなことに対する取り組みの一つ

私は、大学の学びの醍醐味は「知る喜び」だと思います。それは既存の知識を覚えることではなく、他の誰も知らなかったことを知る、明らかにしていくことです。大学の学びには答えがないもの、結果が出るまでに時間がかかるものも多く、時にあんなに頑張ったのに答えが得られなかった、というような場合もあります。しかし、わからないことがわかるようになるプロセスを楽しみ、本当に自分が知りたいこと、あきらかにしたいことがあれば、それも苦行ではなくなります。

○○学部に入ったから、○○ゼミに所属したから、○○を勉強しな

ければならない、という学生もいますが、順序が逆です。やりたいことがあるから、学部やゼミに入る、知りたいことがあるから本を読む、となる方がより望ましい形だと思います。学問は何かを知るために体系化された知識や手法で、やり方の一つに過ぎません。使い方は自由です。自分の所属や経歴で、やり方や使い方を狭めずに色んなことに興味関心を持ち、インプットを増やす機会を沢山持って下さい。そのために、私も教員として、学生の皆さんに本当に好きなこと、やりたいことを問いかけ、引き出す努力をしなければならないと考えています。

これまでの人生で心ときめく何かに出会ったことがなく、好きなことが分からない、興味関心のあるものがないと悩む人も多いと思います。

ただそんな人も、昼はラーメンにする?うどんにする?と問われれば答えられるでしょう。なぜならそこには自分の「好き」が存在しているからです。どんな些細なことでも、例えば小さい頃に好きだったものなどでも構いませんが、それに関して最近の話題で自分のアンテナにひっかかることはなかったでしょうか。まずはそういったものを手掛かりに情報を集めてみてはどうでしょう。そして、それに触れている時に自分がどんな気持ちになるかを観察してみてください。様々なことに挑戦し、自分と向き合う時間を持つるのは大学生の特権ですので、できるかどうかは別として、やりたいことを見つめることができたならば、それだけでも私は大学生生活を過ごす意味があると思います。

図書館で書架（本棚）を眺めることから始めよう

好きなこと、やりたいことが見つかるかどうかは、「出会い」に左右される部分もあります。人との出会いも大切ですが、限られた時間の中で会える人の数は限られています。そんな時に大きな手助けをしてくれるのが、図書館です。図書館にある図書や雑誌、新聞などは人の考え方や意見を代弁してくれます。好きなこととの出会いと図書館は、切っても切れない関係だと思います。

図書館の使い方については、最初は書架にある本の背表紙、タイトルをひたすら眺めてみることをおすすめします。そこで少しでも気になるものがあれば手に取ってみましょう。自分でスマホなどを使って検索をすると、どうしても自分の検索ワードにひっかかる情報しか得ることができません。まずは図書館で本を眺めて自分が気になるキーワードは何かを知ること、そしてそのキーワードが見つかった時に初めて

図書館からのアドバイス

明確な検索戦略を持たないまま、偶発的な発見を期待して漫然と情報を探すことを図書館用語で「ブラウジング」と言います。キーワードが見つかった後に更に関連する資料のある書架のブラウジングを行えば、自分が想定しているよりも関心事に有益な情報や視野が広がる情報が手に入ることも期待できます。参考文献: "ブラウジング", 図書館情報学用語辞典 第5版

[Japan Knowledge Lib >](#)

検索をして、関連する情報に入っていくことに挑戦してみてください。

また、図書館のレファレンスカウンターの利用もおすすめします。ここにいるレファレンスライブラリアンは、皆さんの学びにおいて必要な情報や資料探しの手伝いをしてくれます。自分がまだ何が好きなかわからないのに、膨大な資料の中から自分で資料を探し出すのはなかなか大変なことです。レファレンスライブラリアンとの対話を通して、自分の好きなこと、興味関心に響く資料探しと一緒に、実際にそれらを読んでみることから始めてみてはどうでしょうか。読んでいくうちに、自分にとって関心のある分野が拓けてくるかもしれません。

図書館からのアドバイス

レファレンスカウンターは各館内にあります。資料の所蔵場所や学習・研究テーマの参考になる情報の探し方、データベースの検索方法、探している情報・テーマを扱っている機関などについての相談を受け付けています。詳しくは図書館HPをご確認ください。

[Ask a Librarian >](#)

好きなことを研究に繋げる「問いを立てる」ためのお薦め本

自分で考える、物事を決める、選ぶことに対して苦手意識のある人には、次の本をお薦めします。

▶ [「知的複眼思考法：誰でも持っている創造力のスイッチ」](#) (荻谷剛彦著、講談社、2002年)

大学での研究で不可欠な「問いを立てる」というところにポイントを絞って段階的に作業過程を示してくれる本です。「やりたいこと」を、問いとして立てるのが研究の第一歩。これができるようになると、様々なことが主体的に選択できるようになると思います。

また、研究や科学が難しいと思っている方や研究と現実のつながりがよくわからないと感じている方には次の本をお薦めします。

▶ [「脳のなかの幽霊」](#) (V.S.ラマチャンドラン、サンドラ・ブレイクスリー著；山下篤子訳、角川書店、1999年)

複雑な脳科学の世界ですが、目の前の人の困りごとの原因を考えるとところから研究が始まり、知識を活かせば高価な機材がなくとも身近な道具で仮説を検証し、わからないことを明らかにして、困りごとの解決に導いていくプロセスを読みとってもらうことができます。

新入生へのメッセージ ～図書館を利用して自分の世界を広げよう

知らないことを知る、分からないことを明らかにしていく喜びを、大学生活の中でぜひ感じてほしいと思います。誰にも縛られない、自分の本当に好きなことを突き詰める、探求していくことにぜひチャレンジしてください。そしてその最初のステップとして図書館を利用して、自分の世界を広げたり、いろいろな人や情報に触れたりすることに積極的に取り組んでほしいと思います。



漆原先生の一日

6:30	起床 朝食・身支度
7:30	移動
8:30	メール、事務仕事 授業準備
11:00	授業
13:00	昼食
14:00	授業への質問やコメント確認 授業動画や資料の更新
16:00	ゼミ生の研究・実験指導
19:00	移動
20:00	夕食、入浴 ハムスターの世話、家族との会話
22:00	読書、研究活動
0:30	就寝